

思春期の子宮頸がん予防ワクチン接種プロセスに関わる要因

—女子高校生を対象とした質的分析より—

○ こばやし ゆうこ 小林 優子 (東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科)
あさくら たかし 朝倉 隆司 (東京学芸大学)

【背景】子宮頸がんは20～30代の若い世代に増加している。この疾患は治療により、妊孕性を喪失する可能性があり、若い世代における子宮頸がんの予防は注目すべき課題となっている。国内では平成21年に子宮頸がん予防ワクチン（HPVワクチン）が承認された。このワクチンは、任意接種であることや、ワクチン承認後間もないこともあり、ワクチンの接種状況や、子宮頸がんに関する認識、知識などについて明らかにした研究は数少ない。子宮頸がん等ワクチン接種緊急促進事業により、平成23年度にはほとんどの市区町村で公費補助によるワクチンの接種が実施されてきたものの、補助金の対象とならない場合は約4～5万円を自己負担しなければならない。このことから、高校生がワクチン接種を受けるといふ行動には、保護者の態度や価値観、学校の影響も大きく関わっていると考えられる。

【目的】女子高校生の子宮頸がん予防ワクチンの接種プロセスを構成する要因を明らかにし、それらの関連要因を再構成し、接種に至るプロセスを説明することを目的とした。

【方法】平成23年9月に、神奈川県内の公立高校4校の女子生徒26名を対象に、①子宮頸がんの知識と解釈、②HPVワクチン接種に対する価値観と態度、③ワクチン接種について経験した親とのやりとりの内容を中心とした半構造化面接調査を行った。分析はM-GTAを用いた。インタビュー内容をICレコーダに録音し逐語録を作成した。そして、分析ワークシートを作成し概念を生成した。概念間の関係性を検討し複数の概念からなるカテゴリーを生成し、生成した概念とカテゴリーを用いて、子宮頸がん予防ワクチン接種のプロセスについて図式化し、文章化した。

【結果と考察】対象者26名の内訳は1年生4名、2年生8名、3年生14名であった。1回以上ワクチン接種を受けている生徒は9名、一度も受けていない生徒は17名であった。インタビュー時間は約15分～35分、平均時間は約27分であった。

分析の結果、43の概念が生成され、19のサブカテゴリー、8のカテゴリーが抽出された。ワクチン接種に対する自分の気持ちはワクチン接種を受けたい、ワクチン接種への揺れの2つのサブカテゴリーから構成され、高校生自身のワクチン接種への意思を示した。ワクチン接種に影響する家族要因は、母親の態度と影響、母親のワクチン関連ヘルスリテラシー、健康に対する家族の態度のサブカテゴリーより構成され、ワクチン接種を受けることに対する家族の影響として抽出された。ワクチン接種を阻む要因はワクチンへの不信、経済的負担、制度的な強制力の弱さ、時間のなさの4サブカテゴリーより構成され、ワクチン接種行動のバリアを示した。子宮頸がんや予防ワクチンに関するヘルスリテラシーは子宮頸がん・ワクチンの知識、子宮頸がん・ワクチンの情報の2つのサブカテゴリーより構成された。次に、子宮頸がんに対する認識は身近な人の病気体験、病気の予防意識、子宮頸がんに罹患する可能性、子宮頸がんの怖さの4つのサブカテゴリーで構成された。接種行動につながる調整力は、時間、場所、親の都合の調整、母親との話合いと説得のサブカテゴリーを含んでいた。さらに、性交渉が原因なので早く接種すべき、逆に性交渉が原因なので自分には関係ないといった異性との交際や性行動、友達の接種経験など友達の要因がカテゴリーとして抽出された。Williams K.らは高校生の接種の態度に関連する要因として仲間の意見、親などの意見、現実的な要因、性行動との関連、ワクチンの効果と安全性を挙げており、Dillard J.P.らは、大学生は、両親との話合い、ワクチンの安全性、性行動などをワクチン接種のバリアとして受け止めていると報告している。本研究でもほぼ同様の要因が抽出されていた。

【結論】高校生の子宮頸がん予防ワクチン接種に至るプロセスを構成する要因として、43の概念、19サブカテゴリー、8カテゴリーが生成された。

E-mail; r108001g@st.u-gakugei.ac.jp